学会行事

## 曲直瀬道三生誕四八〇年祭報告記

土屋　伊磋雄

日本医学中興の祖として崇敬されている初代曲直瀬道三（一五〇七～九四）が生誕して、昭和六十二年は四八〇年目に当たる。それを記念し、供養する「曲直瀬道三生誕四八〇年祭」が、九月十三日午前九時より今大路家菩提寺である渋谷区広尾の祥雲寺で盛大に開催された。

本行事は日本医史学会・日本東洋医学会・東亜医学協会・北里研究所東医研医史学研究室が主催団体、東洋医学研究財団・温知会が協賛団体として推進されたものである。

奇しくも、同寺に葬られている二代目道三こと曲直瀬玄朔の高弟・岡本玄治が生誕四〇〇年に当たることも杉立義一会員より教示されたので、併せて岡本玄治の追悼も行われた。

法要のあと、大塚恭男氏の開会の辞で次の四氏による追悼講演が催された。

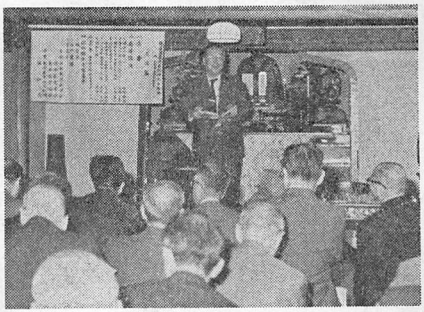
一、慶大所蔵の道三文書について
　　慶応大学教授　高橋正彦
二、岡本玄治の肖像とその周辺
　　日本医史学会理事　杉立義一
三、北村宗龍をめぐる曲直瀬道三・玄朔関係の資料
　　野蔵神社・三上神社宮司　大谷雅彦
四、今大路・曲直瀬家々系一覧
　　東亜医学協会理事長　矢数道明

古文書学の権威・高橋正彦氏は、慶大に所蔵される一〇六巻という厖大な曲直瀬家文書の中から、道三の自筆書状、綸旨・口宣案、二代玄朔門下誓詞などを中心に講演。ちなみにこれらの文書は一四九巻より成り、道三嫡流の所蔵であったのが藤浪剛一博士の手に渡り、その大半が慶大に入ったものである。

講演にあたり道三死去前年のものと推定される自筆書状コピーが聴講者に配布されたが、それには道三自身が八十七歳になったことを述べており、興味深い資料であった。

高橋氏の講演で目をひいたのは、道三が自ら「曲直瀬」を改め、「真瀬」とした文書のことである。曲直瀬から真瀬への改名の時期、またいつ曲直瀬に戻ったかは定かではないが、「曲」はまがる、まげると読み、けっして良字ではないために「真瀬」と改名したのではないかと同氏は推測された。

玄朔門人の誓詞は、実は玄朔一代に止まらず、五代道三玄淵にまで及ぶもので、七〇〇余名の門人の生国、入門年月日まで明瞭に記されており、曲直瀬家一門の門人の全国分布や入門時期を知る上にきわめて貴重である。面白いのは誓詞のはじめに「当門下元法則」と記して、十七箇条にわたる門下の遵守すべき条項が列記されている点である。例をあげれば、他医の悪口を言うなとか、女性の患者の脈を診るときに淫らな気持を起こすな、などといったことで、今日の医師にも遵守してもらいたい条項を紹介し



追悼講演をする杉立義一会員

広尾の祥雲寺で行われた法要

て、会場を沸かせた。

『医心方』の研究家として知られる杉立義一氏は、淀藩々医・竹岡家に伝来する岡本玄治画像と玄朔賛の神農像をポイントに、竹岡家歴代に触れた。岡本玄治の肖像現物は非常に珍しく、当日出席された岡本玄治の御子孫・岡本宰臣夫妻も感無量の面持ちであった。それにつけても杉立氏の綿密な調査には敬服させられる。

神官で、滋賀県野州町の郷土史家として活躍中の大谷雅彦氏は、道三・玄朔の門人であった北村宗龍について報告。宗龍は大谷氏と同郷の野州町出身の医家兼連歌宗匠で、室町末期から江戸初頭の九十二年間を生き抜いた人物である。北村家には道三・玄朔の書状が多く伝わっている。その中に、わが国最初の医学塾啓迪院の夏期講座へ、副学長格の玄朔が、宗龍に出席を報じた書状があり、宗龍に開講日より一日余裕をもたせた上京を指定している。また講義は、玄朔筆頭門下生・岡本玄治に代講させると付記されている点などは、当時の医学塾の運営の一端を知りうる貴重な資料である。

宗龍と道三の往復書簡も珍重で、宗龍が毛利元康の乳児を自宅で預かり、治療に当たったが病状好転せず、師道三に療法の教えを乞うている。道三は施療方法を教えているばかりでなく、宗龍の書状にも細字で添削しているあたりが道三の性格が伺われて興味を引いた。

曲直瀬道三およびその学統の研究で文学博士号を受領したことで著名な矢数道明氏は、今大路家・曲直瀬家の家系一覧を詳細緻密に解説した。今回は小曽戸洋氏が調査した養安院家（曲直瀬正淋）、玄朔の高弟・井上玄徹の墓碑などの話を付け加え、またたく間に予定の講演時間が超過してしまう熱気であった。

日本医史学会の宗田一常務理事の閉会の辞の後、境内の曲直瀬玄朔以下歴代および井上玄徹一族の墓参をして、午後からは初秋の都下をバス二台で、まず江戸医学館のリーダー・多紀家ゆかりの城官寺に向かい、多紀元簡、元堅と一族の墓参。次いで谷中霊園に浅田宗伯ら明治初期の漢方名医を墓参。最後に向島常泉寺に、我が国唯一の張仲景碑を拝覧し、有意義な一日を終了したのであった。

（曲直瀬道三生誕四八〇年祭事務局担当）